



執筆者:マーケット・プレイス・オフィス代表 立澤 芳男(たつざわ よしお)
流通系企業の出店リサーチ・店舗コンセプトの企画立案など、都市、消費、
世代に関するマーケティングの情報収集と分析
元「アクロス」創刊編集長。著書に「百万人の時代」(高木書房)等

第一回 今(いま)どきの大学生

大学全入時代を迎え、大学の経営破綻が話題になっている。このような状況下で、280万人の大学生は、どのような学生生活を送っているのか。現在の学生は、ほとんどが1985(平成2)年以降に生まれた平成世代である。そして、学校週5日制が始まり、運動会で順位をつけない流れが広まった「ゆとり世代」でもある。この新・新人類ともいべき「いまどきの大学生」「いまどきの大学」はどうなっているのか……。

I・大学生に関するデータ／ルック・バック

II・データで見る現代大学生のプロフィール

III・今どきの大学生イメージ

IV・大学と大学生の立場とイメージ

V・大学生の生活費

参考：規模と進学率から見る日本の大学の変遷(ハイライフ研究所・作成制作)

I・大学生に関するデータ／ルック・バック

1) 戦後から現在まで一貫して変わらない「日本の大学生」の社会的立場

戦前はともかく、戦後から今日まで「日本の大学生」の基本的なスタンス(日本の学生は、時間という意味では兵役が無く、お金という意味では親が出すという2重の特殊性を持っている)はあまり変わっていない。

- ①世界の多くの国の青年(男性)は18歳から25歳の間に1年半から2年の兵役があるが、日本の青年は兵役が無い。
- ②世界では一般的ではないが、日本の学生は18歳になっても親の扶養を受けている
- ③日本の大学生は成績が悪くても落第しない。(文部科学省の定員管理が厳しく、大学は学生を落第させられない。)
- ④ファッションにうるさい日本の学生。昭和50年前後はジーパン学生、昭和60年代はフェミニンエレガント。学生らしい服装をしていない学生が多くを占める。しかし、卒業時と就職活動期には、一斉にダーク・スーツに様変わりする。
- ⑤「具体的なキャリア、というビジョンを持たないまま社会に出る学生が主流である日本では大学で得た専門知識を厳しく問われることは少ない。企業教育が待っている。
- ⑥「この世では、能力がある人は多く金を貰っている」という処世訓を信じていること。

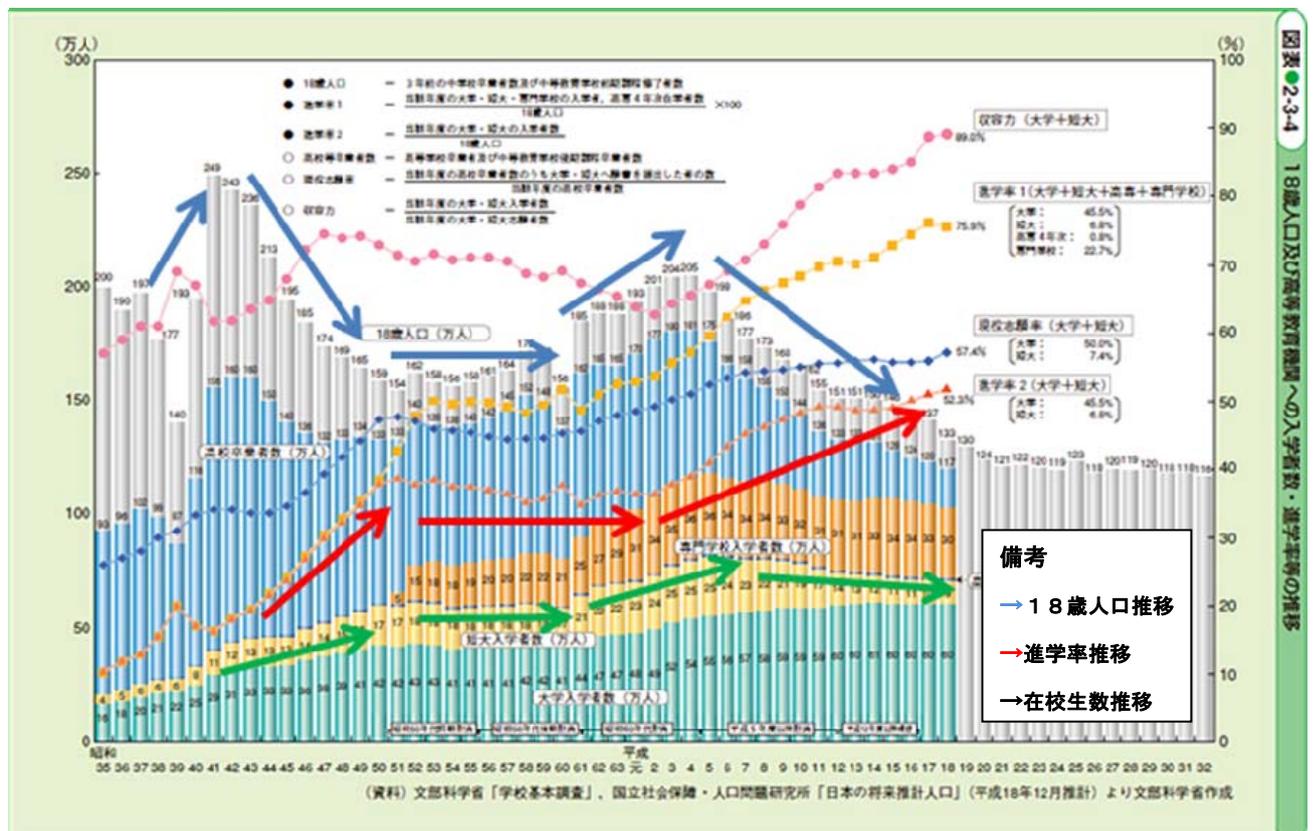
2) 大学の変遷データ

⇒18歳人口の増加(第一次、第二次ベビーブーマー)と経済成長で膨張した「昭和時代の大学」

⇒経済成長が低迷しても進学率の上昇で大学生は280万人になった「平成時代の大学」

区分	学校数	18歳人口	在校生数	大学(学部)への進学率			卒業後就業率		人口1人あたり所得	5年毎伸率
				計	男	女	男	女		
昭和 25(1950)	201		224,923	64.1	45.2		
30(1955)	228	1,682,239	523,355	7.9	13.1	2.4	75.0	67.5	78,109	
35(1960)	245	1,997,931	626,421	8.2	13.7	2.5	86.3	64.1	144,475	85.0
40(1965)	317	1,947,657	937,556	12.8	20.7	4.6	86.6	66.7	272,979	88.9
45(1970)	382	1,947,237	1,406,521	17.1	27.3	6.5	82.8	59.9	588,408	115.6
50(1975)	420	1,585,521	1,734,082	27.2	41.0	12.7	77.5	62.8	1,107,653	88.2
55(1980)	446	1,579,953	1,835,312	26.1	39.3	12.3	78.5	65.7	1,736,212	56.7
60(1985)	460	1,556,578	1,848,698	26.5	38.6	13.7	78.8	72.4	2,156,887	24.2
平成 2(1990)	507	2,005,425	2,133,362	24.6	33.4	15.2	81.0	81.0	2,818,078	30.7
7(1995)	565	1,773,712	2,546,649	32.1	40.7	22.9	68.7	63.7	2,980,628	5.8
12(2000)	649	1,510,995	2,740,023	39.7	47.5	31.5	55.0	57.1	2,929,297	-1.7
17(2005)	726	1,365,471	2,865,051	44.2	51.3	36.8	56.6	64.1	2,877,327	-1.8
18(2006)	744	1,325,208	2,859,212	45.5	52.1	38.5	60.5	68.1		
19(2007)	756	1,298,718	2,828,708	47.2	53.5	40.6	64.0	72.3		

* 18歳人口は、3年前中学校卒業者 出所；文部科学省「学校教育基本調査」、企画庁「国民所得統計」



II・データで見る現代大学生のプロフィール

大学生学生のポジション

- ／学部学生 251 万人。女子は 100 万人台のボリュームに
- ／学校は増えるが学生数は減少傾向で大学経営危機に
- ／企業業績に振り回される就職状況
- ／大学院進学、無業者など卒業後「働かない大学生」も増加中

- 学校数は 756 校（国立 87 校、公立 89 校、私立 580 校だが 19 年度は 12 校増加
 - 学生数は、282 万 9 千人（男子 170 万 2 千人、女子 112 万 7 千人）だが減少傾向
 - 学生数のうち学部学生は 251 万 4 千人、大学院学生は 26 万 2 千人
 - 国立 62 万 7 千人（学生数の 22.2%）、公立 13 万人（同 4.6%）、私立 207 万 2 千人（同 73.2%）
 - 女子学生は 112.7 万人で 39.8%をしめ増加傾向
 - 関係学科別構成比をみると「社会科学」が 36.3%で最も高く、次いで「工学」（16.7%）、「人文科学」（15.8%）等の順。「薬学」、「家政」の比率は年々上昇、「社会科学」、「工学」の比率が低下中
 - 入学状況は、大学学部への入学者数（平成 19 年度）は、61 万 4 千人（国立 10 万 2 千人、公立 2 万 7 千人、私立 48 万 4 千人）で年度ごとに増減の繰り返し
 - 卒業状況は、卒業者（19 年度）は 55 万 9 千人増えているが、進路は、「就職者」は 67.6%、「大学院等への進学者」は 12.0%、「無業者」は一時 10 万人いたが、最近では 7 万人で 12.4%を占める
 - 就職率は企業業績の好調を受け上昇中。就職先は産業別で見ると、男子は「製造業」20.3%、「卸売・小売業」18.8%、「サービス業（他に分類されないもの）」12.7%。女子は「卸売・小売業」16.8%、「金融・保険業」13.9%、「サービス業（他に分類されないもの）」13.6%
- * 参考 文部科学省『学校基本証左平成 19 年度』

現代の大学・大学生のキーワード

現在の大学：大学は、急激なる大衆化により、かつての教育・研究機関としての役割を急速に喪失しつつあり社会の信頼を失っている。

現在の大学	『人生の一大休憩所』、『人材選別配給装置』、『入試と就職の緩衝地帯』、『カルチャーセンター』、『レジャーランド』、『就職への通過駅』
現在の大学生	『不本意入学・出席』、『仮面浪人』、『ダブルスクール族』、『教育依存症候群』、『分数の出来ない大学生』

* 参考 全国大学生生活協同組合連合会、日本学生支援機構レポートより

Ⅲ・今どきの大学生イメージ

- 今どきの大学生は、核家族化、子どもの数の減少で、家族や友だちとの接触の機会が減り、また、都市化が極端に進むなか、人間関係の希薄さから、孤立主義を身につけ、想いを打ち明けられる友人がいない、あるいは他人との共感をもてずにいる。
- 学生の日常生活は、自室、教室、研究室、サークル、アルバイト先を循環的に行動し、友だちとのおしゃべり、ボランティア活動など幅広い。
- 行動も日常は自室と大学とアルバイト先の往き来であるが、春・夏には集中的なアルバイト、合宿、国内・海外旅行と行動範囲が広がる。
- アルバイトをした学生は75.2%だが、自宅生では81.4%が経験している。目的は女子の30%が衣料・バッグを買うため、男子は生活のためが多い。
- ゲーム機&ソフトの確保。PS2とそのソフトを家や下宿にストックする。自慢の種・ご褒美。
日常生活で気にかかっていること、人間関係、就職のこと。
- 周囲との関係づくりについて「周りの空気を読むことを気にし、学校でも通学中でも家でも携帯電話やパソコンで盛んにコミュニケーションを取る。

コメント①

大学では、易しい科目を選択・受講して、「器用に」単位を取得する大学を卒業するための技術の開発が進展し、教室は、学生同士の情報交換の場所となり、大学が、就職のための学歴と友達作りの場と化している。講義の善し悪しよりも、現代の学生は「映像世代」であるから、テレビをみる感覚で講義を受ける。

一方、アルバイトやサークル活動には、情熱を燃やすのが、現代の学生の一面。例えば、大学祭の屋台はプロ顔負けの空間を演出し、“生き生き”と営業活動をする。

コメント②

現代の学生は、余程のことがない限り卒業できる。大学が、「トコロテン方式」で、学生を押し出すからである。それは大学が、就職への単なる過程点にすぎないところから、また新生の入学金や学費の徴収なくして大学経営が成立しないという経営構造側面から派生する。

コメント③

大学という組織は、戦後の大学政策の狙い通り、日本的集団主義＝会社本位主義にどっぷり漬かったまま現代を生き抜いているのである。入試・就職を通じて序列化されたいずれかの大学に入ることによって、学生は、組織の一員として生きていくことを身につけてしまった事実の証明でもあった。個人として自己を豊かにしていくことは大学という場では無理であることを、大学も大学生も実は了解済みだといわざるをえない。

IV・大学と大学生の立場とイメージ

1) 大学生についての一般的イメージ

昔の大学生イメージ	・ 学生運動などで激しく燃え、現代社会を壊そうとたまに暴走する ・ なんでも哲学的に研究しようとし、更に激しく別の人間と討論をしたりする
今の大学生イメージ	・ 講義をいかにサボりつつ、単位習得するか熱心になる ・ 講義よりも別のことに関心が行っている場合が多い

2) つくられる大学生イメージ。大学生イメージのうそ！

実情その① 昔の大学生も現代と同じように講義をサボっていた

現代では有名ブランド大学の学生も講義をサボりがちであるとして、教育の没落を憂う声があるが、これは別に今に始まったことではない。昭和30年代の学生も現代と同じように、バイト（副業）などをして講義をサボるのが日常茶飯事であった。

実情その② 大学の意義が変化しているが、それは当然のこと

昔は中卒、高卒で就職する者が多かったのに対し、現代では大卒で就職する者が増えている。その結果、「大学生」でくくれる範囲と規模は大きく変化し、大学の役目も変わってきている。前提が違うので、単純比較することがそもそも間違い。

戦前の大学では、徐々に大学数、学生数が増えたものの、高等教育進学者が急増したといわれた昭和期でさえ、高等学校、高等師範学校、臨時教員養成所などを含んだ進学率は2.45%に過ぎない。大学に進学したものは一部であり、「学士」の価値は今とは比べものにならない。

実情その③ 大学生（＝若者）は、いつも「時代の産物」である

現代の大学生も30年まえの団塊世代の学生も、社会を合理的・物質的に見、得になりそうもないことやものには一切の興味を示さない。法律を学ぼうが、経済を学ぼうが、歴史を学ぼうが、それが今の自分になんの繋がりがなければ意味がないことを知っている。実存的で退廃的な思想を掲げる。就職ランキングの上位企業は、16年前とあまり変わっていない。「よい大学に入って、よい会社に就職する」という価値観は、昔も今もかわらない。

実情その④ 大学はモラトリアム社会に出て働き続けるようになるまでの休息时间

単位は進学に必要なので取る、アルバイトに励んで自由に使えるお金を稼ぐ、サークルに入って飲み会を楽しみ、友人、異性との出会いを求める。それが戦後の大学で続いている。

実情その⑤ 相も変わらず『親父（おやじ）の自慢』の種としての大学

最近の入学式をみると、父兄の同伴が意外なほど多い。入学試験日、入学手続き、またしかりである。地方から出てきた団塊の世代は、「いなかのオヤジを東京に呼んで」などという台詞をはいたようだが、平成の大学新入生は、「おとうさんにつれられて」大学にやってくる。長男長女時代になって、そこは違うが、やさしさの概念が変わったのかも知れぬ。

V・大学生の生活費

4年間で私立の自宅外生では1,000万円近くの生活費がかかる。1年間で250万円の「金食い虫」にもかかわらず、人々は大学に行く。この状況は、大学を市場において魅力ある産業に成長させている。であるから、18歳人口が増えないにもかかわらず、全国各地で大学が「雨後の竹の子」のように創設された。それにより、大学生と教職員の数が急増した。「若者に石を投げると、大学生にあたる」という世相。

約300万人の大学生と大学教員数13万(うち教授5万)人という巨大な市場マーケットが存在する。

1) 子育て費用

■トータルで子供1人につき2361万円。大学生は4年間で919万円

財団法人子ども未来財団「子育て家庭の経済状況に関する調査研究」(2005年度)によると、子育て費用はトータルで子供1人につき2361万円になる。

子育てにかかる金額は、「生活費」「必要費用」(学費・その他)「選択的費用」の3つに分けられる。「生活費」は、いわゆる日常の生活にかかるお金のうち、子どもの分として分けられる分。「必要費用」は学費・その他の必ずかかる費用。「選択的費用」は、親が選択的にかけている費用。

▼子育て費用(2004年調査)

時期	年齢	費用
妊娠・出産時		541,826円
0歳		500,241円
乳幼児期	1~3歳	1,485,552円(3年間)
幼稚園児期	4~5歳	1,639,365円(2年間)
小学生期	6~11歳	3,579,294円(6年間)
中学生期	12~14歳	2,947,752円(3年間)
高校生期	15~17歳	3,723,765円(3年間)
大学生期	18~21歳	9,188,048円(4年間) うち学費 5,235,684円

資料出所:財団法人子ども未来財団「子育て家庭の経済状況に関する調査研究」(2005年度)、金融広報中央委員会「暮らしと金融なんでもデータ」(平成19年)から

2) 大学生の生活費と収入

■学生生活費費用 大学学部生(昼間部)の学生生活費は年間平均189万5100円

日本学生支援機構がまとめた2006年度の「学生生活調査」

学生生活費=学費+生活費

学費:授業料その他の学校納付金、修学費、課外活動費、通学費

生活費:食費、住居・光熱費、保健衛生費、娯楽・嗜好費、その他日常費

<国立 VS 私立>

- ・大学学部生の学生生活費を国立と私立で比べると、国立が150万900円、私立が201万7200円で、私立が国立より約52万円高い。
- ・内訳をみると、学費は私立が国立より約67万円高く、生活費は食費、住居・光熱費の差等により、国立が私立より約15万円高くなっている。

学生の学生生活費		国立大学	私立大学
学費	授業料その他の納付金	512,700円	1,153,900円
	修学費、課外活動費、通学費	141,400円	169,300円
生活費	食費、住居・光熱費	566,400円	390,800円
	保健衛生費、娯楽・嗜好費、その他の日常費	280,400円	303,200円
合計		150万900円	201万7200円

<下宿生 v s 自宅通学生>

下宿生の学生生活費は自宅通学生の学生生活費を大きく上回っており、その差は年間で約62万円。国立大学の自宅通学生を基準とした場合、国立の下宿生は1.7倍、私立の自宅は1.6倍、私立の下宿生は2.4倍となっている。

	国立大学	私立大学
自宅通学生	1,045,100円	1,717,900円
下宿生	1,769,000円	2,467,200円

■大学生の収入 大学生の収入総額は平均約219万500円（06年度調査）

<大学生の収入平均>

収入内訳	金額	構成比
○親からの仕送り	1,496,300円	68.3%
○奨学金	300,300円	13.7%
○アルバイト	336,300円	15.4%
○定職その他	57,600円	2.5%
合計	2,190,500円	100.0%

<大学生のアルバイト従事状況>

- ・大学生でアルバイトをしている割合は、76.4%、アルバイト非従事 23.6%
- ・アルバイト従事者のうち「家庭からの給付のみでは修学不自由・困難」という人が35.4%

<大学生のいる家庭の年収>

- ・年間平均収入は、846万円（国立大学 792万円、私立大学 865万円）

<大学教授の年収> 統計：厚生労働省「賃金構造基本統計調査」2006

- ・大学教授の平均年収は1,133万円（平均月収：66.6万円、収入幅：850万円～1,500万円、平均年齢：56.7歳）
- ・ちなみに、講師 733万円、助教授 883万円、大学教授 1,133万円

参考； **人口推移と進学率から見る日本の大学の変遷**(ハイライフ研究所・作成)

大学生の数(在校生)は、昭和 35 年当時約 66 万人であったが、現在(平成 19 年)は約 280 万人である。大学生の数は 4.5 倍にも膨張しているが、戦後から現在までの大学の膨張プロセス(国民所得。学校数、在校生数、進学率など)を見ると、大学の発展は、7つの時代に区分できる。

	期間	名称(仮)
第 1 期	昭和 22 年～昭和 35 年	新・旧大学混乱の時代
第 2 期	昭和 36 年～昭和 40 年	大学もインフレの時代
第 3 期	昭和 41 年～昭和 50 年	燃える大学の時代
第 4 期	昭和 51 年～昭和 63 年	迷える大学の時代
第 5 期	平成元年～平成 7 年	大卒苦難の時代
第 6 期	平成 8 年～平成 14 年	ポスト大学ブランド重視(格差)の時代
第 7 期	平成 15 年～	大学経営危機の時代

①新・旧大学混乱の時代(昭和 22 年～昭和 35 年)

第 1 期	新・旧大学混乱の時代
昭和 22(1947)年 ↓ 昭和 35(1960)年	<ul style="list-style-type: none"> 昭和 22(1947)年の教育基本法および学校教育法の制定により、日本の学校制度は 6・3・3・4 の単線型の学校体系が定められた 新制大学は、戦前の大学イメージ(学問の府、政財界のリーダーを育てる場)とは質、量、社会的な位置づけ全てにおいて異なるという不満が拡大 教育機会の均等の理念から、女子学生の大学進学率が上昇
大学在校生数	<ul style="list-style-type: none"> 昭和 23 年 1.2 万人 → 昭和 26 年 31.3 万人 → 昭和 30 年 52.3 万人 → 昭和 35 年 62.6 万人 新制大学・私立大学が次々誕生し、大学生は倍・倍ゲームで増え続けた
大学生の事件簿	<ul style="list-style-type: none"> 昭和 23 年秋、東大法学部学生山崎晃嗣(26 歳)と日本医大生(当時 25 歳)とでヤミ金融「光クラブ」を設立。事業失敗で自殺 昭和 25 年 鹿苑寺(通称・金閣寺)庭園内の国宝建造物・金閣から出火、警察は放火と断定。大谷大学中国語学科 1 年・林承賢を指名手配逮捕 昭和 25 年、「全学連(全日本学生自治会総連合)」結成。30 万人が参加 昭和 34 年 安保国会デモで東大女子学生が死亡
特記事項	<p>* 立教大学文学部では 33 年度から英米文学科と社会学科の卒業論文を、講読あるいは演習に換えて単位がとれるようになる。改正の理由は、新制大学生の学力低下、学生数の増加で卒論指導が不十分なことをあげている</p> <p>(昭和 32 年・9 月毎日新聞)</p>

②大学もインフレ時代(昭和36年～昭和40年)

第2期	大学もインフレ時代
<p>昭和36(1961)年 ↓ 昭和40(1965)年</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・戦後のベビーブームの学生、いわゆる団塊の世代により大学入学志願者の急増する昭和41年～昭和43年年度の対策として、文部省は、入学志願者の合格率を急増期以前と同じ60%に維持することで入学定員の大幅な増加を図った ・大学生が63万人(昭和35年)から94万人まで増え続け、大学生の数は大台の100万人が目前となった ・高経済成長で個人所得も増え、大学進学率が上昇し10%台まで上がった
<p>大学在校生数</p>	<p>・昭和36年 67万人 → 昭和40年 94万人 → 昭和41年 104万人</p>
<p>進学率</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・昭和40年の進学率は、大学12.8% 短大4.1% ・中学から高等学校への進学率は70%台に(中卒「金の卵」は希少に)
<p>大卒就業者数</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・昭和40年の大卒就職者数は、男女計135,419人、女性比は7.7%で、大卒の女性の就職先は公務員・教師・病院など限定的 ・大卒就職率は、男86.6%、女66.7%
<p>大学生の事件簿</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・昭和36年 「女子学生亡国論」が盛んに 早大文学部国文科の女子の割合は、昭和35年に45%となり、翌年は50%を越えた。女子大学生の増加が国を滅ぼすといった「女子学生亡国論」が大きな波紋となった ・昭和39年 大阪大学における大量留年現象をきっかけに、総合大学教養学部での留年が問題化 ・昭和40年 東京農業大学のワングル部で同大学1年生に上級生が蹴るの暴行を加え死亡させた ・昭和40年4月、「ベ平連」発足。戦争反対とアメリカの介入反対を望んだこの運動は学生も巻き込み、市民の運動で全国に広がる。学生に反戦フォークソングブーム
<p>特記事項</p>	<p><就職予備軍、求められた技術></p> <p>この頃重化学工業への産業転換が起こり、メーカーの多くは積極的に新技術の開発、導入により競争力を高めようとした。そのため大学の理・工学部はその技術者の輩出を担った。このような産業界の需要もあり、若者の中には、理系学部へと進学するものが多かった。</p> <p><オリンピックとテレビと車とレジャーの時代></p> <ul style="list-style-type: none"> ・昭和36年 テレビ受信契約1,000万を突破、高度成長で余暇時間が増え、レジャーが浸透 ・昭和39年 東京オリンピック、新幹線

③荒れる大学の時代（団塊世代と学園闘争）（昭和41年～昭和50年）

第3期	荒れる大学の時代（団塊世代と学園闘争）
<p>昭和41(1966)年 ↓ 昭和50(1975)年</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・大学生の中心核に「団塊世代」（昭和22～24年生まれ）が登場 ・大学入学年齢・18歳人口が5年連続150万人（団塊世代）を超える ・大学生は100万人台に突入 ・進学率は昭和40年17.1%から昭和50年に27.2%に ・昭和46年の大学生の刑法犯（業務上（重）過失致死傷犯を除く）による検挙人員は、137（昭和40年＝100）となり、団塊世代の大学生の急激な増加なども加わり、学生の集団暴力事件が多発
<p>大学在校生数</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・昭和41年 <u>104万人</u>→昭和47年 <u>153万人</u>→50年 <u>173万人</u> ・約10年間で大学生が70万人増えた
<p>進学率</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・大学進学率は、昭和40年 <u>12.8%</u>→昭和50年 <u>27.2%</u>に急上昇 ・女子を中心とする短大の進学率も4.5%から11.2%（昭和50年）に
<p>大卒就業者数</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・大卒の就業者数は好景気を受け昭和40年の135,329人から232,683人（昭和50年）に大幅アップ。女性比率も倍増の18.2%になり、銀行、小売業などサービス業に進出 ・但し、学生が大幅に増え、男子就職率は、昭和40年の86.6%から77.5%（昭和50年）に、女子も昭和40年の66.7%から62.89%（同）にダウン
<p>大学生の事件簿</p>	<p><闘争、内ゲバ、校内リンチ。破廉恥教授></p> <ul style="list-style-type: none"> ・昭和41年 全学連再建大会で「中核派」、「社学同（ブントの学生組織）」、「社青同解放派」の「三派全学連」が成立 ・昭和44年 安田講堂事件 ・昭和47年 山岳アジトにおいて軍事訓練が行なわれ、過激派・京浜安保共闘と合同し、「連合赤軍」と名乗るようになった ・昭和48年 青学大・春木教授事件
<p>特記事項</p>	<ul style="list-style-type: none"> * 漫画第一世代の大学生でもあるが、新聞や雑誌で大学生の幼稚化や学力低下が嘆かれている。 「字を知らない大学生」（『朝日新聞』昭和41年3月30日付） 「学問を忘れた大学生」（『朝日新聞』昭和42年7月15日付）

④迷える大学の時代（18歳人口減少と入試関連事件続発）（昭和51年～昭和63年）

第4期	迷える大学の時代（18歳人口減少と入試関連事件続発）
昭和51年 (1976) ↓ 昭和63年 (1988)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大学入学年齢の18歳人口が150万人(昭和41年は249万人)までに激減。以降昭和61年まで18歳人口は伸び悩む ・ 進学率は大学27.2%、短大は11.3%まで高まったが、昭和50年代は横這い続く ・ 大学は量の時代から大きく転換
大学在校生数	<ul style="list-style-type: none"> ・ 昭和51年 <u>179万人</u> → 昭和55年 <u>184万人</u> → 昭和63年 <u>199万人</u> ・ 昭和40年代の10年間では約70万人増、この10年間は約20万人が増加
進学率	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大学進学率は、昭和50年=27.2% → 昭和60年=26.5%になり、0.7ポイントダウン。短大進学率も大学進学率と同様に0.1ポイントダウン
大卒就業者数	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大卒就業者数は232,683人(昭和50年) が288,343人になり、女性比率は18.2%(昭和50年)から23.2%に大幅アップ。女性の社会進出が目立つ ・ 昭和60年の就職率は男78.8%、女72.4%で女性の就職率が7割を超えた
大学生の事件簿	<ul style="list-style-type: none"> ・ 昭和52年 慶大商学部入試問題漏洩事件、愛知医大裏口入学事件 ・ 昭和53年 拓大応援団しごき事件（昭和45年にも集団リンチ） ・ 昭和55年 早大入試問題漏洩事件 ・ 昭和58年 国士舘大学理事刺殺事件、学校の経営問題

⑤大卒苦難の時代（学生の増加、バブル経済と平成不況）（平成元年～平成7年）

第5期	大卒苦難の時代（学生の増加、バブル経済と平成不況）
平成元年 (1998) ↓ 平成7年 (1995)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 昭和61年～平成4年にかけて、18歳人口が毎年約200万人前後で続いた ・ 第二次ベビーブーマの大学進学で平成元年に大学生は200万人になる ・ この間、受験戦争が激化し、大学進学率が上昇しはじめた ・ 大学受験者数が急増し、大学が積極的に入学希望者、入学者獲得競争に走る
大学在校生数	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大学生が平成元年=207万人 → 平成7年=255万人になり6年間で50万人増
進学率	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大学進学率は、平成元年の26.5%から平成7年32.1%までに上昇 ・ 短大進学率は、11.1%(平成元年) → 13.2%となったが、平成7年がピークに
大卒就業者数	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大卒就業者数は、平成の不況で、平成2年の324,250人に対して平成7年は331,011人と微増。卒業生は増えているのに就職が困難になった ・ 大卒就職率 男子は平成2年81% → 平成7年68.7%、女子も81% → 63.7%と大きくダウン。・ 大卒の「就職氷河期」を迎える
大学生の事件簿	<ul style="list-style-type: none"> ・ 平成3年 明大替え玉受験事件
特記事項	<ul style="list-style-type: none"> * 大卒無業者、フリーターの増加 平成元年前後は「バブル経済」の影響で就職状況は良好に推移していたが、平成7年は、男子は7割を割る68.7%、女子も63.7%と大きくダウン * 大卒の「就職氷河期」を向かえる

⑥ポスト大学／ブランド重視(格差)の時代(平成8年～平成17年)

第6期	ポスト大学／ブランド重視(格差)の時代
<p>平成8年 (1996) ↓ 平成17年 (2005)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・減り続ける18歳人口(平成3年204万人→平成7年177万人→平成10年150万人→平成17年133万人) ・平成7年大学生が250万人になったが、その後大学生数は伸び悩み(前年比1~2%前後)、平成17年に大学生はピーク(287万人)に ・平成6年に大学進学率が始めて30%台に突入し、平成14年には40.5%になった ・進学率の上昇に頼る大学体質で、大学もブランド重視に向かい始めた ・長引く平成不況で就職氷河期は続いた
<p>大学在校生数</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・平成7年 255万人 → 平成17年 287万人(ピーク) → 平成18年 286万人 ・在校生が減りはじめ、大学経営の破綻につながる
<p>進学率</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・大学の進学率は、平成8年 33.4% → 平成15年 41.3%(男子(47.8%、女子34.4%)、男子は二人に一人が大学に進学) ・短大進学率は、平成12年に10%を切り、平成15年は7.7%に
<p>大学卒就職者数 及び就業率</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・大学卒業者数は50万人台と増えているが、就職者数は、平成不況が長引き、平成15年は299,987人となり30万人を下回る。女性比率は、42%にアップ。 ・平成15年の大卒男子の就職率は52.6%で、女子(58.8%)を下回る
<p>大学生の事件簿</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・平成13年 山形大入試ミス事件 ・平成15年 スーフリ事件 元早大生・現役大学生などスーパーフリーのメンバーが共謀し、卒業式のパーティーの二次会が開かれた東京・六本木で、18歳だった女子大生にアルコール度数の高い酒を無理に飲ませビル階級の踊り場で暴行
<p>特記事項</p>	<p>≪大学生とは思えない稚拙な動機や短絡的な犯行≫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「彼女にプレゼントを贈るためにやった」。駒沢や帝京などの私大生3人らが、半年間で家電量販店などからDVDなど計約700点(約350万円相当)を万引し、警視庁に逮捕

⑦大学経営危機の時代に入入（平成 18 年～？）

第 7 期	大学経営危機の時代に入入
平成 18 年 (2006) ↓ ?	<ul style="list-style-type: none"> ・平成 18 年、19 年と二年連続で大学在校生が減少 ・18 歳人口が激減（平成 4 年 205 万人→平成 19 年 130 万人）、大学全入時代といわれるようになる。大学収容力は 90% 台に ・大学経営の破綻問題（受験者数減少傾向、40% 前半で固定化する進学率、受験・入学費用・授業料、高コスト経営、知的水準の低下）が露見
大学在校生数	・減少し始めた大学在校生 平成 17 年 287 万人 →平成 18 年 286 万人 →平成 19 年 283 万人
進学率	・平成 17 年 大学進学率 41.3% （男子 47.8% 女子 34.4%）、短大 7.7%
大学卒業生数 及び就業率	<ul style="list-style-type: none"> ・卒業生は増え続け、56 万人に ・大卒就業率は景気回復基調を受け 60% 台に戻り、平成 18 年 63.7%、平成 19 年は 67.6% に。但し、男子より女子の就職率が高くなってきている（平成 19 年 男子 64%、女子 72.3%）
大学生の事件簿	<ul style="list-style-type: none"> ・平成 18 年 大阪府東大阪市の大学生ら 2 人が集団暴行を受け、生き埋めにされたリンチ殺人事件 ・平成 19 年 関東学院大学の学生が大麻取締法違反で逮捕 ・平成 20 年 横浜市大の学生の博士取得と教員の謝礼受領問題
特記事項	<p><大学全入時代と大学生></p> <p>大学への進学希望者と合格者が同じになる「大学全入時代」を控える中、万引や婦女暴行、殺人など、大学生の犯罪が相次いでいる。「幼稚」「自立心が弱い」など、今どきの大学生の心の問題が根底にある。大学生の犯罪は、この数年、集団暴行・殺人が多いが、最近では、窃盗、覚醒剤使用、振り込め詐欺などの犯人として大学生が逮捕される事件が増えている。</p> <p>* 事件を起こした大学では、ブランドが傷つくことにつながることを恐れるなど、教育の最高機関である大学が抱える悩みは深い</p>

まとめ

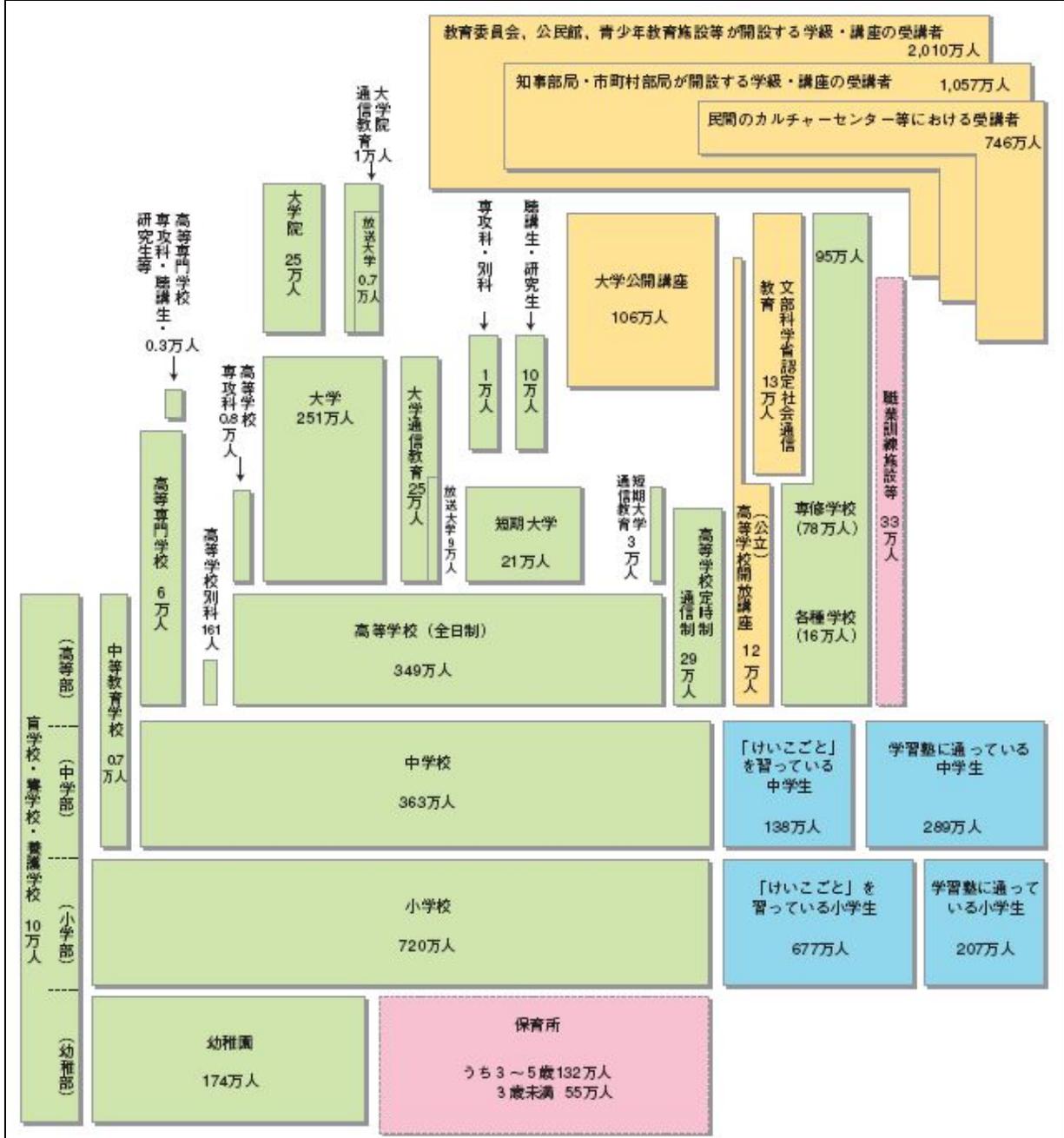
大学と大学生の数が急増し、「猫も杓子も大学へ」という時代の到来である。大学の大量化そのものであるが、それは、大学の「学問の府」から「レジャーランド」への変遷、を意味する以外のなにものでもない。大量の大学生の誕生は、その価値を著しく減少せしめ、加えて、大学および教職員・学生の社会的価値（ステイタス）を急速に低下させる社会現象となっている。

誰もが大学に進学できる時代になればなるほど、日本人の横並び思想は刺激され、人々を大学へ走らせる。特に、かつて自分達（団塊世代）が果たし得なかった大学進学を、当時の大学のイメージのままに、子供に託すといった「親の希望を子供がかなえる」という構造がそこに垣間見える。

ただそこに見えるものは、ブランド名や偏差値だけを目安として大学選びをする、させるという子供と大人のパフォーマンス行動だけが浮かび上がる。（立澤・記）

資料 1

学習人口の現状(平成17年度) - 文部科学省ホームページから



資料；文部科学省「学校基本調査報告書」（平成17年度）、「社会教育調査報告書」（平成14年度）、「平成5年度学習塾等に関する実態調査」等

資料2

データ①／戦後・昭和の時代の大学

区分		学 校	教員数	在校生数	入学者 数	大学・学部への進学率			卒業者 数	大学卒業就業率		
						計(%)	男	女		計(%)	男	女
昭和 23	1948	12	…	11,978	…	…	…	…	…	…	…	…
24	49	178	7,437	126,868	89,398	…	…	…	…	…	…	…
25	50	201	11,534	224,923	91,472	…	…	…	1,858	63.8	64.1	45.2
26	51	203	17,475	313,158	110,255	…	…	…	18,997	76.2	74.7	85.6
27	52	220	23,123	399,513	123,002	…	…	…	28,122	81.0	81.0	81.2
28	53	226	32,819	446,927	129,848	…	…	…	79,583	79.8	80.2	76.2
29	54	227	36,489	491,956	135,833	7.9	13.3	2.4	81,887	80.3	81.4	72.8
30	55	228	38,010	523,355	132,296	7.9	13.1	2.4	94,735	73.9	75.0	67.5
31	56	228	39,289	547,253	135,740	7.8	13.1	2.3	107,867	73.2	76.0	56.7
32	57	231	40,444	564,454	137,451	9.0	15.2	2.5	113,622	76.9	80.1	57.2
33	58	234	41,481	578,060	142,584	8.6	14.5	2.4	116,083	77.4	80.4	59.1
34	59	239	42,775	597,697	151,879	8.1	13.7	2.3	117,974	79.0	82.3	57.1
35	60	245	44,434	626,421	162,922	8.2	13.7	2.5	119,809	83.2	86.3	64.1
36	61	250	45,471	670,192	175,832	9.3	15.4	3.0	131,979	85.6	88.4	69.1
37	62	260	47,850	727,104	197,211	10.0	16.5	3.3	128,153	86.6	89.4	70.0
38	63	270	50,911	794,100	211,681	12.0	19.8	3.9	138,479	86.2	88.9	70.6
39	64	291	54,408	852,572	217,763	15.5	25.6	5.1	149,384	85.6	88.3	71.0
40	65	317	57,445	937,556	249,917	12.8	20.7	4.6	162,349	83.4	86.6	66.7
41	66	346	62,642	1,044,296	292,958	11.8	18.7	4.5	178,279	79.9	83.5	61.9
42	67	369	66,738	1,160,425	312,747	12.9	20.5	4.9	187,418	80.5	84.3	62.1
43	68	377	71,786	1,270,189	325,632	13.8	22.0	5.2	194,628	81.7	85.3	64.0
44	69	379	74,706	1,354,827	329,374	15.4	24.7	5.8	217,805	79.0	83.1	61.5
45	70	382	76,275	1,406,521	333,037	17.1	27.3	6.5	240,921	78.1	82.8	59.9
46	71	389	78,848	1,468,538	357,821	19.4	30.3	8.0	272,949	79.0	83.4	60.8
47	72	398	80,959	1,529,163	376,147	21.6	33.5	9.3	292,946	75.7	80.0	57.9
48	73	405	83,838	1,597,282	389,560	23.4	35.6	10.6	297,166	75.3	78.9	60.3
49	74	410	86,576	1,659,338	407,528	25.1	38.1	11.6	300,135	76.9	80.1	63.9
50	75	420	89,648	1,734,082	423,942	27.2	41.0	12.7	313,072	74.3	77.5	62.8
51	76	423	92,929	1,791,786	420,616	27.3	40.9	13.0	326,167	70.7	74.5	57.6
52	77	431	95,470	1,839,363	428,412	26.4	39.6	12.6	339,819	72.0	75.9	59.4
53	78	433	98,173	1,862,262	425,718	26.9	40.8	12.5	356,981	71.9	75.7	60.2
54	79	443	100,735	1,846,368	407,635	26.1	39.3	12.2	374,887	73.6	77.0	62.9
55	80	446	102,989	1,835,312	412,437	26.1	39.3	12.3	378,666	75.3	78.5	65.7
56	81	451	105,117	1,822,117	413,236	25.7	38.6	12.2	386,057	76.2	79.0	67.6

57	82	455	107,422	1,817,650	414,536	25.3	37.9	12.2	382,466	76.7	79.1	69.2
58	83	457	109,139	1,834,493	420,458	24.4	36.1	12.2	369,069	76.4	78.7	69.4
59	84	460	110,662	1,843,153	416,002	24.8	36.4	12.7	372,247	76.7	78.6	70.7
60	85	460	112,249	1,848,698	411,993	26.5	38.6	13.7	373,302	77.2	78.8	72.4
61	86	465	113,877	1,879,532	436,896	23.6	34.2	12.5	376,260	77.5	78.9	73.4
62	87	474	115,863	1,934,483	465,503	24.7	35.3	13.6	382,656	77.1	78.3	73.6
63	88	490	118,513	1,994,616	472,965	25.1	35.3	14.4	382,828	77.8	78.8	75.2

データ②平成時代の大学

区分	学校	教員数	在校生数	入学者数	大学・学部への進学率			卒業者数	大学卒業就業率			
					計(%)	男	女		計(%)	男	女	
平成元	89	499	121,140	2,066,962	476,786	24.7	34.1	14.7	376,688	79.6	80.1	78.5
2	90	507	123,838	2,133,362	492,340	24.6	33.4	15.2	400,103	81.0	81.0	81.0
3	91	514	126,445	2,205,516	521,899	25.5	34.5	16.1	428,079	81.3	81.1	81.8
4	92	523	129,024	2,293,269	541,604	26.4	35.2	17.3	437,878	79.9	79.7	80.4
5	93	534	131,833	2,389,648	554,973	28.0	36.6	19.0	445,774	76.2	76.5	75.6
6	94	552	134,849	2,481,805	560,815	30.1	38.9	21.0	451,898	70.5	71.8	67.6
7	95	565	137,464	2,546,649	568,576	32.1	40.7	22.9	493,277	67.1	68.7	63.7
8	96	576	139,608	2,596,667	579,154	33.4	41.9	24.6	512,814	65.9	67.1	63.5
9	97	586	141,782	2,633,790	586,688	34.9	43.4	26.0	524,512	66.6	67.5	64.8
10	98	604	144,310	2,668,086	590,743	36.4	44.9	27.5	529,606	65.6	66.2	64.5
11	99	622	147,579	2,701,104	589,559	38.2	46.5	29.4	532,436	60.1	60.3	59.8
12	2000	649	150,563	2,740,023	599,655	39.7	47.5	31.5	538,683	55.8	55.0	57.1
13	01	669	152,572	2,765,705	603,953	39.9	46.9	32.7	545,512	57.3	55.9	59.6
14	02	686	155,050	2,786,032	609,337	40.5	47.0	33.8	547,711	56.9	54.9	60.0
15	03	702	156,155	2,803,980	604,785	41.3	47.8	34.4	544,894	55.1	52.6	58.8
16	04	709	158,770	2,809,295	598,331	42.4	49.3	35.2	548,897	55.8	53.1	59.7
17	05	726	161,690	2,865,051	603,760	44.2	51.3	36.8	551,016	59.7	56.6	64.1
18	06	744	164,473	2,859,212	603,054	45.5	52.1	38.5	558,184	63.7	60.5	68.1
19	07	756	167,636	2,828,708		47.2	53.5	40.6		67.6	64.0	72.3

* 大学(学部)への進学率(過年度高卒者等を含む)

注： 1) 国・公・私立の合計数である 2) 在校生は学院生も含む 3) 「大学」は新制大学のみである

資料： 文部科学省「学校基本調査—高等教育」